

7. 長野県 上田情報ライブラリー

～あなたの仕事の経験を図書館に残し地域に活かす～ 団塊世代の仕事録作成事業

(平成19年度地域の図書館サービス充実支援事業)

(1) 事業の趣旨・概要

団塊世代が多数定年退職する2007年問題にあたり、地域の退職者を主な対象として、その仕事に関する自分史を執筆するための講座を開催し、受講者が「団塊世代の仕事録」を執筆・制作する。執筆した仕事録は図書館へ寄贈することにより、団塊世代の仕事の記録・地域文化の記録として永く保存するとともに、市民の閲覧に供する。さらにホームページへの掲載、タウン誌への抄録の連載などを通して、地域住民や地域産業に対する暮らし支援、ビジネス支援の図書館資料としても活用し、地域や住民にとって役立つ図書館づくりを推進する。

※委託先・図書館の概要(平成20年3月末現在)

委託先	自治体・機関名	上田市情報ライブラリー
	所在地	〒386-0025 長野県上田市天神1-8-1 上田駅前ビル「パレオ」4階
	連絡先	TEL 0268-29-0210
		FAX 0268-29-0211
URL http://www.city.ueda.nagano.jp/hp/jlib/index.html		
図書館の概要(平成20年3月末現在)	職員数	専任職員4名(うち司書1名) 臨時職員7名(うち司書3名)
	開館時間	平日(火を除く)10:00～20:30 土・日・祝 10:00～18:00
	年間開館日数	290日
	蔵書数	(雑誌、視聴覚資料含む)48,153点
	利用登録者数	94,766人
	年間利用者数	(入館者)173,179人
	年間貸出冊数	92,717冊
	運営状況	図書館(ライブラリー)職員がカウンター業務、選書、レファレンスなどの基本的な図書館業務を行っているが、様々な事業や来館者の情報検索サポートなどについては、NPO法人上田図書館倶楽部との協働により運営している。

※地域の現況・特色

上田市は、平成18年3月6日に上田市、丸子町、真田町、武石村が新設合併して誕生した長野県東部(東信地方)の中核都市であり、県内3位の人口を誇る。県庁所在地の長野市から40kmのところであり、市域は上田盆地全体に広がり、千曲川が市を二分するように横断している。

駅前図書館「上田情報ライブラリー」は第二種駅前再開発事業の中で、平成16年4月に開館した。上田駅前という便利な場所に立地しているため、通勤・通学者、買い物客、外国籍市民、子どもから高齢者まで幅広い層に利用されている。また、これまでの図書館機能に加え、「情報」を取り入れた生活密着型の図書館を目指しており、「暮らしやビジネス」に役立つこと、「千曲川地域文化を創造・発信」することをコンセプトに掲げ、「市民や大学と協働した図書館事業」の展開にも取り組んでいる。図書・雑誌・新聞の印刷媒体に加え、インターネット、商用データベースの電子媒体、ビデオ、DVD等の映像資料も提供できる未来型の「ハイブリッド・ライブラリー」となることを目指し、これまでの図書館の枠にとらわれない、各種の企画展、セミナー、文化事業も開催している。上田市内には他に市立上田図書館がある。

面積:552km² 人口:16万1千人

(2) 事業の実施体制

事業実施にあたっては、「NPO法人上田図書館倶楽部」の会員を母体として「上田市図書館サービス充実支援実行委員会」を組織した。

<委員構成>

NPO法人上田図書館倶楽部理事長、上田図書館倶楽部副理事長、上田図書館倶楽部会員6名、「週刊上田」元編集長、上田情報ライブラリー館長、上田情報ライブラリー次長 計11名

<主な役割>

事業全般に関する企画、運営

※「NPO法人上田図書館倶楽部」は上田情報ライブラリーにおいて図書館と協働して学習活動・情報サービス活動・文化事業・喫茶の運営などを行っているNPO法人である。

「NPO法人上田図書館倶楽部」について

上田情報ライブラリーが開設される時、市民との協働運営をすることを旨とし、その母体となる団体を立ち上げるために、上田図書館が様々な市民団体（図書館利用者団体、図書館の将来を考える会、図書館協議会等）へ声をかけ、また、図書館づくり学習会が持たれた。そうした中、市民発起人の呼びかけにより、設立総会が開かれ、個人会員として参加する形で平成16年1月、上田図書館倶楽部が発足した。以来、図書館の運営に参画し、活動を重ね、平成18年12月にはNPO法人として認可された。

現在は学習活動部会（文学講座、絵手紙教室、読み聞かせ人材養成講座等を実施）、情報サービス部会（情報検索講座、来館者の情報収集・検索活動のための個人サポート、情報検索能力向上のための事業等を実施）、文化事業部会（朗読、コンサート等の文化事業を実施）、喫茶事業部会（ライブラリー内「喫茶つつじ」の運営）の4部会で活動している。20年度現在、会員は65名である。

(3) 事業体系

実施した事業は下記の4つである。

①講演会	i 講演「仕事と書くこと」 ii 事例発表「仕事録を執筆した経験から」
②連続講座	i オリエンテーション「2007年問題と地域の図書館、図書館の使い方」 ii 執筆編集講座 iii 資料収集講座 iv WORD 講座
③受講者による執筆	i 仕事録執筆
④まとめ発表	i 抄録発表会

(4) 当事業に取り組んだ背景・経緯

上田情報ライブラリーでは、図書館と上田図書館倶楽部が協働し、様々な事業に取り組んできたが、新しい試みとして「書くことに対するサポートをしていきたい」ということが図書館職員と倶楽部会員との間で話題になった。話題になった時期が、団塊世代が大量退職する2007年問題の時期であったため、団塊世代をメインターゲットにし、「書くこと」をテーマとした地域に役立つ新たな図書館サービスを開拓しようと考えた。

(5) 各事業の内容と現在までの取り組み状況

①講演会

i 講演（一般公開）

演題：「仕事と書くこと・・・海外特派員として働いて」

講師：元毎日新聞社ロンドン支局長

対象：団塊の世代中心の市民（参加者 40 名）

内容：海外特派員として、戦争など極限状態を経験しながら執筆した記事を具体的に紹介しながら「読みたくなる文を書く」ための心構えについての講演があった。



ii 事例発表（①の講演会に引き続き開催された）

演題：「仕事録を執筆した経験から」

講師：家庭菜園・農業経営アドバイザー

内容：JAを退職後、農業指導を行っている講師から、農業という切り口で仕事に関する本を出版した執筆体験談が話された。

⇒仕事に関する自分史を執筆発刊した経験者の事例発表により、受講者の意欲を喚起することができた。

②連続講座

期間：平成 19 年 8 月 3 日～20 年 3 月 7 日

対象：団塊世代を中心とした仕事録作成を希望する市民

i オリエンテーション

演題：「2007 年問題と地域の図書館、図書館の使い方」

講師：長野県図書館協会事務局長

対象：団塊の世代中心の仕事録作成を希望する市民（この時点での参加者は約 20 名）

内容：地域の図書館の意義や役割、調べもの等での図書館の使い方などの講義

⇒図書館の地域における役割や具体的な使い方について確認し、はじめて利用する人にはPRの機会となった。

ii 執筆編集講座（全 8 回実施 ここからの参加者は 13 名）

○第 1 回「執筆、編集の基礎」

講師：週刊上田元編集長

内容：テーマの選定、本が出来上がるまでの基本的な流れについての講義

○第 2 回「テーマに沿って書くには」

講師：週刊上田元編集長、フリーランスライター

内容：タイトル、章立て、見出しなどの基本的な構成についての講義

○第 3 回「自分史と出版」

<前半>

講師：信濃毎日新聞社出版部次長

内容：自分史を出版する部署に所属している講師から、自分史への取り組み方についての講義

執筆個別相談での添削指導の様子



<後半>

講師：週刊上田元編集長

内容：執筆個別相談

○第4回・第5回

講師：週刊上田元編集長、フリーランスライター

内容：執筆個別相談

○第6回

講師：上田図書館倶楽部

内容：編集、製本の仕方についての実技指導と作業

<作業手順>

パソコンで入力・編集した仕事録のデータを冊子用の特殊用紙に図書館のプリンターでカラー印刷

⇒印刷した用紙を製本キットで製本

※印刷製本は1人2冊ずつ—1冊は本人用、1冊は図書館用

○第7回・第8回

講師：週刊上田元編集長、フリーランスライター

内容：執筆個別相談、編集・製本作業

※個々の受講者の進捗状況に応じた作業を行った。

パソコンでの編集作業の様子



【工夫のポイント】

○2名の専門講師（作家、編集者）によるきめ細やかな指導体制

計5回実施した執筆個別相談は、構想段階の相談から執筆した原稿の添削指導まで、2名の講師がきめ細やかな対応を行い、一般の人に読んでもらえる内容に仕上げることができた。

※はじめから個人の自己満足に終わらない内容の「仕事録」を作成することに留意して取り組んだ。

○執筆個別相談の待ち時間が受講者同士の情報交換の場

2人の講師の指導の順番を待っている時間は、受講者同士の自主的な情報交換の場となり、有意義な交流の場となった。

○編集に必要なすべての機器類を用意し使い方を指導

パソコン、スキャナーなどの機器類は上田情報ライブラリーの備品を館内で貸し出し、パソコンの基本的な使い方や資料・写真をデジタルデータとして取り込むためのスキャナーの使い方なども上田図書館倶楽部情報サービス部会が中心となり指導を行った。

○原稿をデジタルデータで作成

受講者の手元に仕事録の原稿がデジタルデータで残ったことで、自分で増刷するなど、その後の活用が行いやすくなった。

※家族、友人等に配布する分を自分で増刷した受講者もみられた。

iii 資料収集講座

講師：上田図書館倶楽部

内容：執筆に必要な資料収集のため、情報検索の方法をレクチャーし、年表、地図などの基礎資料については図書館所蔵の現物を使用した。

新聞記事データベースの検索



資料収集講座の様子



iv WORD講座

講師：上田図書館倶楽部

内容：文章作成のためのWORDの使い方を指導した。

※仕事録作成にあたっては、入力、編集、レイアウトなどすべてWORDを使用して原稿をデジタルデータ化した。

※多くの方が自分で原稿を入力したが、80代の受講者の分は手書き原稿を図書館倶楽部メンバーが入力した。また、家族（娘、息子など）が入力作業を行った受講者もみられた。

⇒入力することで原稿を読んだ子どもから反響があり、親子の世代間交流へと発展したケースもみられた。

<受講者のパソコンの習熟度>

パソコンの使い方の初歩的なことは知っていたが、ページ設定や写真の取り込みなどははじめて体験する人が多かった。

③受講者による執筆

i 仕事録執筆

原稿執筆は受講者がそれぞれのペースで行った。初稿ができた人から執筆個別相談にて、講師の添削指導を受けた。13名中11名（うち団塊世代は半数）が仕事録を執筆完了したが、2名は健康上の理由から途中で執筆を中断した。

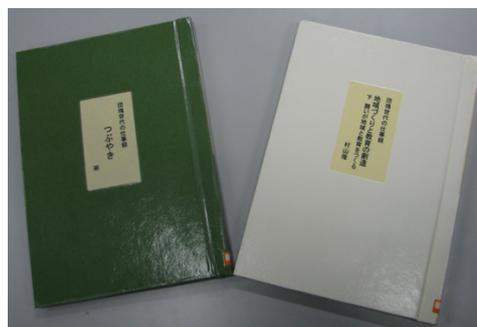
受講者の年代：50代—1名、60代—5名、70代—4名、80代—1名

元銀行マン、元教師、元薬剤師、農業従事者など多方面にわたる仕事録が完成した。

製本され完成した仕事録

<完成した仕事録のタイトル>

- 自分への報告書
- つぶやき
- 昭和ヒトケタ生まれの仕事録
- 教師になどなりたくなかった
- 空を見たのは
- 市民と協働の図書館 上田情報ライブラリー
- 広野の落日
- 土と共に44年 ～花を咲かせ作物を作る～
- 你好（ニイハオ）・再見（サイチェン）・テリマカシ（ありがとう）～東南アジアの国々を巡って、折に触れて過ごした異文化の世界～
- 地域づくりと教育の創造 ～住民から学んだ人間教師の自己変革の軌跡～
- 市役所生活思い出すまま





手づくり製本され、貸し出し用に装備された仕事録



中のページはカラー印刷

④まとめ発表

i 抄録発表会

講師：週刊上田元編集長、フリーランスライター

内容：各人が執筆した仕事録のタイトル、内容、執筆した感想、今後どのようにしていきたいかの4項目をA4判1～2枚の原稿にまとめ、抄録発表会を行った。

⇒上田ケーブルビジョンが発表会の様子をすべて収録し、後日放映した。



ケーブルテレビの取材が入った



発表会の様子

<その後の取り組み>

平成20年4月10日に出来上がった仕事録11冊の図書館への贈呈式が行われた。図書館に寄贈された11冊の仕事録は書誌データを登録後、5月から上田情報ライブラリーの「団塊世代の仕事録コーナー」に設置され、一般市民への貸し出しに供されている。



執筆者代表からライブラリー館長へ目録の贈呈



館内の目立つ場所にある仕事録コーナー

【工夫のポイント】

上田情報ライブラリーと上田図書館倶楽部のホームページにすべての事業の経過や執筆内容を掲載した。
⇒遠隔者に対しても広報することができた。

(6) 事業の成果・効果と事業実施後の取り組み

①事業の成果・効果

事業の主な成果・効果は次のとおりである。

i 図書館の機能・役割について

○図書館の活動で「書く」ことに関する実績ができた。

図書館の役割の1つとして「調べて書く」活動へのサポートを開拓でき、実績を残すことができた。

○市民の記録を将来に残す道筋ができた。

地域資料の保存という図書館の役割を果たすことができた。

○図書館の多様な機能を市民に理解してもらうことができた。

ii 受講者・作品について

○受講者に「書く」ことへの意欲が生まれた。

受講者3名は20年度に新作に取り組んでいる。

○講座終了後、受講者により親睦グループが結成された。

20年度実施の「執筆編集講座」では、19年度の受講者に執筆体験談を話してもらった。抄録発表会にもオブザーバーとして参加してもらう予定である。

また、神奈川県座間市の高齢者学級「あすなる大学」の「調べ学習」グループのメンバーと連絡を取り合い、今後交流会を持つ予定である。

○仕事録シリーズが市民に読まれている。

このシリーズ全体で貸出が約100回出ている。同じジャンルの他の蔵書に比べるとかなり貸出が多い。貸出が多い理由としては、地縁のもっている力（知っている人が書いている）や身近に感じられる内容であるからだと推測される。

iii 取材や反響について

○マスコミによる取材

信濃毎日新聞、日本経済新聞から取材を受けた。上田ケーブルビジョンからは事業開始時から参加者の執筆の様子の継続取材があり、抄録発表会の模様は録画で放映された。

⇒取材を通して、仕事録執筆の意義や図書館の機能を広く周知することができた。

○他機関等からの問い合わせ、市民からの反響等が多く寄せられた

- ・他県から「書いて残すこと」に関する活動の問い合わせがあった。
- ・「団塊世代に対する図書館の取り組み」を卒論のテーマにした大学生から取材があった。
- ・上田市マルチメディア情報センターから内容について問い合わせがあった。
- ・仕事録を読んだ市民から「感銘を受けた」という感想メールが届いた。
- ・受講者の1人が地域の市民グループに呼ばれ、体験談を講話した。

【成功のキーポイント】

★実行委員が企画・運営に直接関わった

○実行委員の数名が直接受講者に対しての講師やサポート役を務めた。

○実行委員が企画のカリキュラムを組む段階から関わっていたため、講師等も実行委員の人脈で講座の内容に適した専門家に依頼できた。

- ★図書館のもつ資料・人材を活かして、レファレンスや情報収集、WORDによる文章作成の指導が行えた
- 上田図書館倶楽部情報サービス部では通常の活動の中で、個人来館者の情報検索のサポート、パソコン講座での指導等を行っていたため、その活動内容を当委託事業の運営に直接反映させることができた。
- 上田情報ライブラリーにハイブリット図書館としての機能があるため、通常資料に加え、電子媒体である新聞記事のデータベース等を使用でき、執筆に役立てることができた。

★仕事録作成にかかわる様々な作業の中で、受講者に図書館のもつ多様な機能を具体的に紹介できた
 多くの受講者の図書館のイメージは「本を借りる所」「学生が勉強する所」であったが、講座に参加後、図書館の様々な機能を知り、関心を示した受講者が多くみられた(受講者の半数は図書館未利用者であった)。
 ⇒地域や暮らしに役立つ図書館という役割のPRになった。

②事業実施後の取り組み

委託事業実施後、平成20年度の取り組みとして次の事業を実施した。

i ～仕事や研究の記録を図書館に残し地域に伝える～「執筆編集講座」

長野県NPO活動助成事業で実施し、講座の内容・手法は19年度の委託事業とほぼ同じに展開している。半額補助の事業のため、受講料として19,000円の負担があったが受講者は集り、12名が執筆を完了した。

対象：団塊世代に限定しない設定にした。

テーマ：仕事だけではなく自分が研究したことにも広げた。間口を広げたことにより、テーマがバラエティに富んでいる。

⇒上田の音楽史の研究、エコハウスをつくった体験、満州から引き揚げてきた子どもの頃の体験等



20年度「執筆編集講座」の様子

(7) 課題と今後の展望

①課題と今後の展望

課題及び今後の展望については次のとおりである。

i 仕事録の対象・内容について

団塊世代をメインターゲットにして仕事録作成事業に取り組んだが、仕事を辞めた直後は仕事のことを書くのは難しく、5年～10年経って、振り返る形で書くほうが書きやすいことがわかった。また、自分史はその人が生きてきた証であるので、仕事に限らず、その人が長年取り組んできたことでも次世代に残すべきものがあるため、20年度は上記のように対象もテーマも間口を広げて取り組んだ。

仕事録に関しては、後に執筆するとき、手がかりになるもの(ビジネス手帳など)を残しておく参考になる。現役世代の人にも後に執筆する可能性を考えて、そのようなアドバイスを行っていききたい。

ii 「書く」講座の継続について

「書く」講座は、次世代につなげていくものを残せ、世代間交流のステージとしても使える事業だと考えているが、講座についての予算措置がないので、県や市の助成金等を活用して今後も「書く」講座は継続していきたい。また、市民の目で記録したことを地域の情報として共有することも図書館の役割だと考えており、今後も「書く文化」の重要性を市民や地域にアピールしていきたい。